

小児における一過性高アルカリホスファターゼ血症の後方視的検討

◎中口 駿¹⁾、渡邊 香緒里¹⁾、山ヶ城 学¹⁾、秦 由紀美¹⁾、曾我部 光洋¹⁾、吉田 賢二郎¹⁾、児玉 由紀子¹⁾、梶 勝史¹⁾
社会医療法人 真美会 中野こども病院¹⁾

【はじめに】一過性高アルカリホスファターゼ（以下 ALP）血症（Transient Hyperphosphatasemia:TH）は、肝疾患や骨疾患のない小児に発症し、血中 ALP 濃度が基準値の数倍から数十倍と異常高値を示す病態である。TH のアイソザイムの特徴として、ALP1 と ALP2 の中間位にバンドを示す。今回、当院で TH を認めた症例を後方視的に検討したので報告する。

【対象と方法】2014 年 1 月から 2019 年 12 月までの入院患者 22,094 名のうち ALP（JSCC 勧告法）が 2,000IU/L 以上で肝逸脱酵素（AST、ALT）が基準値内の 256 名を対象とした。検査機器は、現キヤノンメディカルシステムズ株式会社、生化学自動分析装置 Accute TBA-40FR（2014 年 4 月～2019 年 4 月）、Accute RX（2019 年 5 月～）。検査試薬は、株式会社シノテスト クイックオートネオ ALP-JS II 7170 R1、R2。アイソザイム測定は、株式会社エスアールエルに外注委託した。

【結果】対象患児 256 名は、男児 149 名（58%）、女児 107 名（42%）であった。年齢は、0 歳から 13 歳までで

1 歳が最も多く、152 名 59%を占めた。月別では、2018 年 5 月が最も多く 14 件、次いで 2017 年 6 月が 13 件であった。疾患別では、急性気管支肺炎が 124 件で最も多かった。その中で RS が 47 件、hMP が 10 件、インフルエンザが 2 件検出された。年間 RS 患者数と比較したところ RS 罹患患者が多い月に必ずしも TH 患者が増加していなかった。年間の入院患者数で発生率を確認したところ全体で 1.15%であり、最も多かった 2018 年では 1.81%だった。アイソザイム測定では、256 件中 125 件を検査し、121 件がバンドを示していたが 4 件は示していなかった。川崎病で TH を伴った患者は、8 名おりうち 3 名がアイソザイム測定をしていた。3 名ともデンシトグラムは、TH の典型的な形を示していた。

【考察】今回の結果より TH は、1 歳代で好発することがわかった。月別の発生率結果より、5 月、6 月が多いことから季節性があるかもしれない。また、一番多く検出した RS の年間数と比較したが必ずしも増加しておらず、病原特異性はない可能性が示唆された。

（中野こども病院 臨床検査科 06-6952-4771）